『世界最悪の紛争「コンゴ」―平和以外に何でもある国―』

米川正子、創成社新書、2010 年

おやさと研究所准教授
森　洋明　*Yomei Mori*

アフリカには二つのコンゴがある。一つはコンゴ共和国（首都はブラザビル）で、日本の 90％の国土に約 400 万の人口。もう一つはコンゴ民主共和国（首都はキンシャサ）で、日本の約 6 倍の国土（世界で 12 番目、アフリカ大陸で 4 番目の広さ）に 6,000 万から 7,000 万の人口がある。同じ名前を持つこの二つの国は、植民地前にはコンゴ王国（Royaume du Kongo）として、現在のような二分された形ではなかった。しかし、植民地統治により現在のコンゴ共和国はフランス領となり、コンゴ民主共和国はベルギー領となった。そしてそれが、それからの両国の歴史を大きく変えていくことになるのである。この本はベルギー領のコンゴ民主共和国の話である。

「平和以外に何でもある国」という強烈なサブタイトルがつけられているが、この本を読んでいけばその実態がよく分かる。かつてベルギー領ではあったが、そもそも最初は議会の影響もないベルギー王の完全な「私有地」（その後ベルギー領となる）だった。その時には、当時世界的に需要が高まってきたゴムで巨額の収入を得るために、ベルギー王レオポルド 2 世が、過酷な労働条件でゴム原料の採集を現地人に課し、厳しいノルマが達成できなければ手を切り落とすという非道な統治を行っていた。一説には 20 年間に 1,000 万人近くもの命がなくなったとも言われている。この国の悲劇の歴史は 100 年にわたって続いており、本書では以下のように列挙されている。

① レオポルド 2 世の私有地であった。
② 国連事務総長の飛行機の墜落事故で死亡（暗殺の可能性大）。
③ 第一次コンゴ戦争中、ルワンダ・ブルンジ難民やコンゴ市民数万人が「虐殺」。
④ モブツ元大統領は世界 3 位の汚職者。
⑤ 周辺国を含む計 19 ヵ国が関与した「アフリカ第一次大戦」の舞台国。
⑥ ルムンバ初代首相と L. カビラ前大統領が暗殺死。
⑦ 1998 年からの紛争の犠牲者数は 10 年間で 540 万人。（第二次世界大戦以降、最大級）。
⑧ 1996 年から現在も続く天然資源の不法搾取。
⑨ 世界最悪と言われる性的暴力の氾濫。
⑩ 1960 年代と 2000 年代の 2 回、世界最大の PKO 軍が展開。

まさしく「これだけの悲劇を経験した国は、世界にコンゴしかない」という著者の言い方が納得できる歴史である。さらに、人道支援機関に関わる人の言葉を引用して、「虐殺からエボラ出血熱まで。火山噴火から飛行機の墜落事故まで。唯一ないのは津波だけ」と続いていく。しかし、その津波も 1960 年代にタンガニーカ湖で起きたことが確認されたことにより、サブタイルの通り「平和以外に何でもある国」になってしまった。そしてそれが、レオポルド 2 世時代でもそうであったように、世界的にも大きな注目を浴びていないことが、惨な状態を一層深刻化しているのである。世界からも見放されている理由として著者は、以下の 3 つを挙げている。

① 衝撃的な生々しい映像がないこと。
② 慢性化した緊急事態で国際社会が「コンゴ疲れ」になっていること。
③ コンゴ東部には多くの関係者が入り乱れており、そのほとんどが西欧諸国の指導者や主要メディアと協力関係にある。

著者は 2007 年から 1 年半にわたり、コンゴ東部のゴマという都市で、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の所長として勤務した。また、それ以前にも、アフリカ中部「大湖地域」周辺の人道支援に 10 年間携わっている。コンゴ東部のキブ州を担当し、難民オペレーション独特の難しさを目の当たりにする。その理由として、

① UNHCR は、出身国の代わりに避難民を保護する一方で、当該国政府の保護下にあり、国家主権に触れるような問題
② 避難民の登録の難しさで、特に救援物資が目的でキャンプ周辺の村人が「避難民」に紛れるといったこと
③ 関係者間との調整の問題

の 3 点を指摘している。

しかしその一方で、難民キャンプでの人権侵害の問題は常に深刻であり、略奪、不法徴収、強制徴兵、強制労働、強制移動や性的暴力といったものが横行している。その加害者の多くはコンゴ軍や反政府勢力の軍人で、本来一般市民を守る立場の者が、給与の未払いなので市民から不法に徴収することによって自活しているという。また、人権侵害を犯しても、それを追跡する習慣すらないので、まともな刑罰は受けないことが指摘されている。性的暴力に関しては「女性や少女にとって、コンゴ東部は世界で最悪の場所だ」との ICC（国際刑事裁判所）の発言を引用し、残忍な状況が記されている。

日本から見ればまだまだ遠い地域であるアフリカ大陸。その中でも、このコンゴがある赤道アフリカ地域は最も遠いといえるだろう。二つの「コンゴ」があることも知られていないことが多い。最貧国 179 ヵ国中、177 番目の国で、その平均寿命は 46 歳とさえ言われている。アフリカ経済が世界的に見ても高度な成長率を記録する一方で、一般の人たちの多くがまだまだ貧困に苦しみ、さまざまな人権侵害にさらされている。

2012 年 11 月、東部で反政府部隊が武力蜂起をしたと報道された。主要都市であるゴマに向けて侵攻する部隊に対し、同国内で展開している国連平和維持部隊がヘリコプターなどで部隊に攻撃を加えた。しかし、反政府部隊は市街地に迫っており、住民はゴマから避難を開始し、近隣地帯のさらなる治安悪化が懸念されている。

この本は 2010 年に出版されたものであるが、その中に書かれている状態は今も続いているのである。この国に「平和もある」と言える日がいつやってくるのだろうか。